

第四百二回 青葉会

令和元年十月二十四日(木) 午後一時半〜四時半 文京区民センター会議室

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 在間千恵

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 古田昇

〈紙上選句〉

星田啓子 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄  
赤田堅 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 村田くに子  
山崎亜也 山本三恵

《互選句》

六点

ヴェネツィアの石畳へと秋雨浸む

千恵 (忠・五・弘・龍・敏・亜)

五点

湿原の風の背に乗る赤蜻蛉

孤舟 (紀・弘・孝・允・亜)

◎ 野分明スクラム押して又押して

五郎太 (紀・忠・孤・千・龍)

◎ 御即位の大札寿ぐ秋の虹

弘子 (堅・忠・孤・孝・五・允)

◎ (「寿ぐ」↓「を祝ぐ」の方がいいのでは?)

健介 (紀・孤・孝・正・く)

◎ 現(うっ)なる平安絵巻や菊薫る

(◎…中七の「や」は不要)

◎ 秋灯下友が遺せし初句集

堂哉 (孤・敏・允・く・三)

◎ 帰りたや兄の新米噛みしめて

忠彦 (眞・紀・允・正)

◎ 缶蹴りの缶の置き去り秋夕焼

孤舟 (眞・千・孝・亜)

◎ ふくべより注がるる銘酒後の月

全 (堅・正・く・三)

◎ 蕎麦前の一献選び秋の宵

千恵 (堅・紀・龍・敏)

◎ 離郷せし山河の崩れ鷹渡る

盛雄 (眞・紀・孤・弘)

◎ 今朝は皆天気予報士運動会日

忠彦 (紀・弘・敏)

(敢えて字余りした由だが、削った方がいいのでは?)

◎ 初鴨の嘴(はし)より沼のひと滴

孤舟 (五・龍・三)

◎ 二坪の学校田にも案山子あり

五郎太 (眞・忠・千)

◎ 秋天や華文ミステリ揃ふ店

全 (紀・弘・亜)

(内山書店…スズラン通り)

◎ 菊薫る吉野氏破顔のノーベル賞

弘子 (紀・千・允)

◎ 幼児の澄みし瞳に秋の空

ゆたか (孤・敏・允)

◎ 蒼茫や泥の町捨て野分去る

けい子 (紀・孝・三)

◎ 秋天下原爆ドームに軍機かな

紀久男 (孤・く)

◎ 空襲の恐怖のやうな台風来

忠彦 (紀・孤)

◎ 行く秋や予防接種を夫婦して

全 (眞・正)

◎ 香は命(いのち)短く消えし金木犀

全 (堅・千)

◎ 指の間に零す磨ぎ汁今年米

孤舟 (千・亜)

◎ 大花野一人になりたき人放つ

弘子 (孤・五)

◎ 水澄むや水の都は爽(き)やかなり

千恵 (五・く)

◎ 衣被つるり剥きつつ次は何

全 (忠・五)

◎ ママに手を曳かれハロウインの魔女来る

恵洲 (孤・孝)

◎ 世界地図見てゐるやうな秋の雲

昇 (孤・龍)

◎ 銀杏のたわわな下は小走りに

啓子 (紀・龍)

◎ 匂ひ立つ死出の道行菊人形

けい子 (紀・亜)

◎ 山粧ふ友からの便りステージ四(よと)

全 (紀・亜)

◎ 山粧ふ友からの便りステージ四(よと)

全 (紀・亜)

一点

十月や信楽狸は玄関番  
秋刀魚焼く匂ひ書斎に流れ来る

天牛 (紀・正)  
そらお (忠)

台風の暴威大河を崩しけり  
晚酌や酔芋茎平げ飲みあきず

全 (紀)  
紀久男 (堅)

走り蕎麦天狗連中声援す

全 (く)

(新宿の旦那衆「どんぐり会」の邦楽会)

ラグビーや洋酒がぶがぶ凱歌挙ぐ

全 (忠)

仏語交ふラグビー客の敵島

全 (敏)

学友の近況長し草紅葉

五郎太 (紀)

砂山は崩るるものよ月見草

弘子 (紀)

イタリアの秋や遺跡に人溢る

千恵 (真)

気を悪くさせし夜寒の受話器置く

恵洲 (三)

サキソフオンがピアノを娶る秋うらら

堂哉 (弘)

紅葉狩母の口癖見納めぬ

全 (龍)

島々の山影海に秋夕焼

ゆたか (堅)

栃の実やカランボタンと戸をたたく

啓子 (紀)

紅葉手に大騒ぎなる赤子かな

規雄 (紀)

朝刊をとればによつきり曼珠沙華

天牛 (三)

秋寒や特に気になる血の巡り

全 (忠)

母郷に入り麦とろを食ふひとり旅(丸子の宿)

盛雄 (紀)

●次回青葉会

\* \* \* \* \*

十一月二十八日(木) 午後一時半〜四時半 文京区民センター会議室

▲当季雑詠各自五句 投句は二句

十二月九日(月) 年忘れ句会

新宿末広亭・昼席見物 十二時〜十六時半 木戸銭2,700円

「虎連坊(とられんぼう)」忘年句会 十七時半〜二十時半 会費5,170円

(地下鉄「新宿三丁目駅」直結「東新宿ビル6F」)

正月五日(日) 吉例初芝居見物

浅草公会堂「新春花形歌舞伎」・第二部 十五時〜十八時

新年会 飯田屋(どぜう) 十八時半〜二十時半

初句会 一月二十三日(木) 午後一時半〜四時半 文京区民センター会議室



令和元年十一月二十日

以上 文責 紀久男

令和元年十月青葉会報

一 今回は常連の天牛さんと猛さんが欠席で6名出席。投句は大阪・捺染部（綿業本部）OB  
会出席されたゆたかさんから11名。五郎太さんが進行役を買って出られ、御覧のようにイタ  
リアへ旅行された千恵さんが初のトップ。五郎太さん弘子さん好成绩でした。

弘子さん寄贈の本郷三丁目・三原堂の「大学最中」と天乃屋の「古代米煎餅」、五郎太さ  
んの鈴蘭通り文銭堂の栗饅頭、千恵さんの純吟「蓬萊」（飛驒高山）、小生の広島土産（今  
中友作さん：S55入社・審査部OB）「賀茂鶴」の純米大吟醸『敵島』、小生の缶ビール  
とおかきを堪能し乍ら快調に進行。

回覧（一）眞希子さんからのFAX（二）「紅レポート」9号（三）初芝居総見「新春浅草  
歌舞伎」のチラシ（四）大滝君の落語会チラシ（五）啓子さんが後援会事務局長の「梯剛之  
ピアノリサイタル」チラシ（六）古今亭志ん馬七回忌追善落語会チラシ（七）庄司さんを囲  
む会チラシ（八）今中友作さんから拝借の「今中文庫目録―近世今中家と広島藩―」（H1  
8・12・4広島大学出版会¥1,850、113頁）

話題（一）正明さんの順調な回復状況（二）400回記念合同句集に早くも原稿送られてい  
ること（三）新人お一人年内に（四）稲垣真澄さん、高梨由美子さんに復帰促していること  
（五）9月末の小川さん偲ぶ会に現役バリバリの娘さん初参加。蕎麦の「松翁」のあと二次  
会のベルギービールの店「ブラッセル」でシメイの赤（小川さん愛飲）を御馳走になりました。  
た。

二 関係者近詠

男泣き庄するハンカチ妻の葬 眞希子 駅頭の少女のコーラス愛の羽根 盛雄

雨乞や年金で守る田畑へ 全 老ひてから学ぶ俳句や懐手 全

夏瘦せて白髪増やして伝道者 全 彼岸花逢ひたき人は遠き人 全

墓に父施設に母訪ふ嫡子なり 全 学校も教師も劣化そぞろ寒 健介

犬枇杷と教えて走る女の子 弘子 秋深む学成り難きを学びけり 全

お喋りな孫一人欲し夕涼み 全 「沈没」はベストセラーなりき台風禍 全

狭ひのよと亡夫を語る夏屋敷 全 声変わりしつっ訴ふ赤い羽根 全

夕焼や信濃男山は影立てて 全 寄席太鼓学ぶ前座の冬の汗 紀久男

われ走る月走る犬遠吠えす 陽亮 冬浅し勤め帰りの夜学かな 全

来るたびに迷ふ病院秋暑し 全 新酒酌み声色まねぶ長寿蔵 全

もろもろの器具と薬と妻の秋 全 「ささらぎ句会」 105 11月 川口襄

点滴の秒の速さを守る夜長 全 薄暑光盲導犬は眼閉ぢ 全

藪枯しがレージセルに稀観本 全 ふるさとへ続く空あり虹の橋 全

明日手術（オビ）と友の字乱れ汗にじみ 紀久男 腕白を釘づけにして兜虫 全

―「森の座」― 11月号 ざり蟹の己が濁りに紛れ入る 全

補助線を一本引いて冬用意 正明 天道虫翅の水玉割つて飛ぶ 全

波立てる心を消しに行く花野 全 雨冷えや衣入れ換へ夕暮れぬ 亜也

蛇笏忌や甲斐駒の空晴れ渡り 允章 声かけて貼りたや他家の破れ障子 全

寺町の灯洩れくる十三夜 全 明け方に網舟帰る枯岬（御前崎） 紀久男

過ぎてより金木犀の匂ひけり 全 かさ上げの堤決壊秋出水（千曲川） 全

令和元年十一月二十一日

紀久男記